
夜桜みる夢。(番外編)翔・・・。

楡崎夏芽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜桜みる夢。(番外編) 翔……。

【コード】

N66200

【作者名】

榆崎夏芽

【あらすじ】

夜桜みる夢。 恋花火の番外編です。今回は、翔の目線で書いてみました。

別れの雨。

自分の大切な人を、人の道から、外させてはならない。後ろ指さされるような人にしては、ならない。

自分出来る事はなんだろう。あれから、翔は、考えていた。雨が降り出していた。甘い匂いは、街中を包む。アスファルトが、濃厚な色に変っていく。行きかう親子連れが、あわてて、駐車場まで、走り出していた。幼稚園のお迎えだろうか。目に映る親子連れが、全て、凜と優奈に見えた。

「子供にとつてはさ、本当の親と一緒にいるほうが、幸せなんだよ。」

兄貴に言われた。

「例え、どんな親でもだ。」
「そうだと思う。」

「人妻に手を出すなんて・・・お前・・・」
友人が、絶句した。

「別れるよ。リスクが多すぎるだろう？親の事考えろよ。」
親の事。

「ふっ・・・」

翔は、ベランダから、下を見下ろしていた。

「結局。あなた達が、ついてまわるのか・・・」

「翔？どうしたの？」

後ろから、話しかけられた。翔の母親だ。

「連絡がないから、来てみれば、こんなに、洗濯物ためてて。もう帰るからね」

母親は、仕事を辞めた事に気付いていた。だが、五月蠅い父親には、内緒にするつもりだ。

「いつでも、帰ってきていいのよ。あなたには、会社を継いでもらうつもりで、大学まで出したのよ。それなのに、卒業すると、お菓

子作りを勉強するなんて、フランスにいつちやうんだから……。前の会社も、ただの雑貨屋っていうじゃない？」

「いいんだよ……。親父の会社なんて。」

「お兄さんには、失望してるの。せめて、あなただけでも、会社を手伝ってくれば、楽できるのに……。」

母親が、帰り支度を始めたので、少し、安心した。

「期待するなよ。」

親も年だ。先の事を考えなければならぬ。だが、今の翔の心には、凜の事だけが、深く、のしかかっていた。

「早く、お嫁さん。みつけてね。」

曖昧な顔をする翔を後に、母親は、マンションを出て行った。雨が強く、降り始めていた。

「凜。」

逢いたい……。が。

「もしもし……。」

翔は携帯をとった。相手を思うなら、迷わせなく、次の人生を送るために、自分が、しなくてはならない事……。それは。冷たく、凜との別れをはっきりさせる事。凜にとっても、優奈にとっても。ここで、自分との判れをはっきりしておいたほうがいいであろう。

最後の優しさであり、最善策。

「翔？」

携帯に出たのは、紛れもなく、自分の大切な人の声であった。雨が更に強く降り出していた。

あなたを傷つける・・・。

電話に出たのは、忘れもしない人の声だった。ああ・・・この声だ。翔は、思った。忘れてたくても、忘れられない。メルアドを変えようかと何度も、思った。それでも、凜との接点を失いたくない。悩んでいる間に、先に凜が変えた。先を越された感じだった。連絡をとろうとも、思った。何度も、思いながら、思いとどまっていた。二人の恋に先はない。行き着く答えは、別れだけ。自分達の恋が、人々のつまらない中傷を浴びる前に形を変えてしまおうか、方法はない。終らせよう。はっきりと、別れを告げ、互いに触れない。それが、互いを思い別れる形・・・。

「凜？」

何を話そうか。自分達が、こうなる事が最初から、わかっていて、逢っていたのか？凜は、本当に自分を思っていてくれたのか、つまらない疑問が、胸を焦がしていた。

「翔？」

久しぶりに聞く凜の声。忘れた事はない。

「凜。やっぱり、きつちり、話しておくべきだったよね。」

「・・・。」

凜は、黙っていた。

「俺達、一緒には居られない。」

「ごめんなさい。」

「どうして、謝るの？」

翔は、尋ねた。

「最初から、こうなると思ってた・・・。」

「最初から？どうして・・・。わかっていて、一緒にいたの？」

「あたしの我儘だから。翔とただ・・・このまま、一緒にいらればって、思ってた。」

「凜。無理だよ。最初から、俺達は、無理だったんだ。」

何も考えずに、過ごした日々があった。

「真剣に考えれば、答えは、わかっていたんだ。その答えを見ないふりをしていた。」

「でも。翔。あたしの気持ちの变りはない。」

「凜。迷わせるなよ……。」

「翔を、今でも……。」

「あなたは、勝手すぎる。」

翔は、声を荒げた。今。別れを決めてる。諦めて、別れるのだ。未練はいけない。ここで、凜の翔への気持ちを聞いてしまったら、また、決心が揺らぐ。潔く、凜を突き放そう。

「いつでも、そうだ……。自分の都合のいいように、解釈する。」

一緒になれない不安。哀しみが怒りとなって、突き上げた。

「終わったんだよ……。凜。俺達は……。」

「翔。」

凜が、電話の向こうで泣いていた。このまま、嘘だと言って、傍に行きたかった。すぐ、抱きしめてやりたかった。でも、それでは、更に、凜を傷つけてしまう。

「最初から……。」

言い様のない哀しみがあつた。もう、この人に逢う事は無いのだろうか……。二度と逢っては行けないのだろうか。少し前までは、何も考えずに逢っていた。もっと、大切にすれば良かった。あの時間には、戻れない。

「最初から……。無理だったんだよ。」

自分に言い聞かせるように、翔は言った。未練だけが、残ってしまった。自分にとって、凜に対して、最後にして、最大の愛情って、なんだろう。やっぱり、あおれは、冷たくする事しかないのだろうか。翔の冷たい言葉に、凜は、絶句していた。

「ごめんなさい……。」

消え入りそうな声だった。泣いている。凜が、自分の言葉で傷つき、泣いていた。

「さよなら。」

翔は、乱暴に告げた。これ以上、話していたら、自分も泣き出しそうだった。

「凜。」

切った後で、翔は、呟いていた。

「ごめん・・・。」

力がなかった。今、すぐ、凜を受け止めるには、非力だった。翔は、一人、誰もいない部屋で、遠い街を見下ろしていた。雨が、激しく降り出していた。自分の迷う続ける気持ちを打ち消すかのようにな・・・。

杏奈との出逢い。

杏奈との出逢いは、職場でだった。ほとんど同期。いつも、翔と目が逢うと、微笑んできた。好印象だった。入ってきたばかりの、二人は、資格取得の研修やら何やら、一緒に過ごす事が多かった。

「いつも、ここにいますね。」

喫茶ルームで、勉強する翔の隣に杏奈も陣取った。

「ここなら、コーヒーも、飲めるしね。」

気さくに話しかける杏奈に、翔は、答えた。同じくらいの妹がいる。

「なかなか、はかどらなくて・・・。」

言いながら、杏奈は、携帯を気にしていた。

「メール。良くしてるよね？」

翔は、杏奈が、携帯を気にする姿をよく見ていた。

「わかります？」

「良く、持つてるから・・・。彼氏？」

何の気なしに、翔が聞くと杏奈は、戸惑った。

「別に、深い意味はないよ。」

翔は、笑った。

「だって、いても、おかしくないだろう？」

「うん・・・。」

杏奈は、戸惑った。彼氏がいる事実を知られたくないようだった。

「彼氏というか・・・。友達というか・・・。」

返答に困っていた。

「じゃあ。友達という事しておいたら？」

翔は、笑いかけた。

「そうですね。」

杏奈は、翔を見つめていた。この時から、杏奈は、翔に魅かれていたのかもしれない。翔の行くところに、必ず杏奈の姿があった。

愛嬌もあり、見た目も良い杏奈に、追いかけて、翔も悪い気は

しなかった。いつしか。周りも、杏奈と翔は、付き合っていると思うようになっていた。

「一応さ。。。」

翔は、杏奈を呼び出していた。

「職場では、節度ある行動していた方がよくない？」

「そのつもりでいるけど。」

「違うよ。杏奈。行き過ぎるよ。」

「だって、心配なの。」

「俺は変わらないよ。このままだよ。」

「でも。。。」

「だからって、話しかける女みんなに、後から、いろいろ聞くのは不味いよ。」

「翔が、どこかに行ってしまうそつで。。。」

「誰と？」

話の途中で、また、杏奈の携帯がなった。

「杏奈。。。」

翔は、苛立った。

「男だろつ？」

「。。。」

杏奈は、答えない。

「別れたんじゃ、なかったのか？」

「友達だから。。。別れないよ。」

曖昧に笑った。

「翔。心配なら。。。」

杏奈の答えに、翔は、不満だった。

「心配なら。。。一緒に居て。」

「一緒にいるだろつ？」

「そうじゃ。。。なくて。」

杏奈は、婦人科系が、弱かった。

「結婚してほしいの。」

「それなら・・・。杏奈。今の。お前の周りの男達と、手を切るのが先だろうか？」

杏奈は、父親へのコンプレックスが強いのか、男との関係が曖昧になりがちだった。

「本当に、結婚を考えるなら、それからだろうか？」

と、言いながら、翔自身もまだ、結婚を考えられないでいた。親の仕事は、継ぎたくない。大学まで、出してもらった上に、専門まで行かせて貰った。好きな事をしている。金持ちの、ボンボンにありがちで、自由な生活をしていた。

「そしたら、考えてくれる？」

杏奈は、結婚の条件と勘違いしたようだ。

「そうだな・・・。」

いつかは、考える日が、来るのかもしれない。

「その時期が来たらね。」

翔は、曖昧な返事をしていた。それが、杏奈の行動をエスカレートさせる事も知らずに。

凜との出逢い。

翔が初めて、凜と出逢ったのは、職場ではなかった。きっと、凜は、翔場で、案内された時と思っっているかもしれない。何日前に、翔と逢っていた。それは、二人の職場のあるビルの一階に入っている雑貨やであった。

「すみません。すみません。」

時間がないのか、レジで、あわてている声がした。翔は、丁度、休憩時間の合間をぬって、買い物に来ていた。アロマのデュフューザーを見ていた。

「すみません!」

視線は、翔を見ていた。

「レジ。お願いします!」

翔の腕にしがみついていた。

「時間がなくて……。あのお迎えに時間が……。」

叫びながら、翔をレジに誘導していた。

「違いますって。違いますよ。」

翔は、断った。確かに、翔は、店の制服を着ていたのだ、間違われとも仕方がなかったが、その位、見分けがつきそうな、店だった。

「店員さんじゃないの?」

凜は、声をあげた。

「そうですよ……。勘弁してください。」

「嘘!」

凜は、翔から、手を離れた。

「ご……。ごめんなさい!今日、コンタクトもしてなくて……。」

あわてて、凜は、駆け出していた。

「ちよつと!」

購入しかけた物をレジに残して、凜は、店から駆け出していた。

「待って!」

翔が、追いかけてよとすると、意外に凜は立ち止まり戻ってきた。

「あの……。」

「はい？」

翔は意表をつかれた。

「あの……。駐車料の小銭がなくて……。それで、崩そうとしてたんですけど……。」

「いくらなの？」

「ええ？でも。あの……。」

凜は慌ててた。

「今、すぐ……。戻らないとなんです。車が……。」

「車？」

「遮断機の前に……。」

「ええ？」

翔は、面食らった。慌てて一緒に駐車場まで、葉知る事になったのだが、目の悪い凜は、何一つ覚えてなかった。後から、いろいろ聞きたい事があると、思っていたが最後まで、聞く事はなかった。凜のしっかりしているようで、抜けている所が、翔は何よりも、愛おしかった。きつと、その時から、翔は、凜が、気になっていたのである。

「もう、何、考えているの？」

杏奈は、翔の心が、どこかに傾くのを察する力がある。別の事を考えるとすぐ、翔に声をかけた。

「何も……。」

「そおかな？」

杏奈は、翔に腕を絡めてきた。

「こら！職場だぞ」

「いいじゃん。」

「ケジメつけるよ。」

「だって。」

杏奈のケジメのなさが苦痛だった。それが、なければ、その時の翔

にとつて、杏奈は、可愛い存在だった。

「あたしだけ、見えて。」

「わかってるよ。」

「うん。」

杏奈は、嬉しそうに、笑った。この笑顔も、凜の前では、氷つく事になる。

魅かれる翔。

たぶん、それから、だったんだと思う。凜が、職場に来た時、翔は、気付いていた。あの時の女性である事を……。でも、目の悪い凜は、何も、気付いていなかった。気が付いて欲しいと思いつながら、自然に、目で追いかけていたと思う。平静を装いながら、気持ちは、凜に傾いていった。機会があれば、触れてしまいたいと思うのは、当たり前前では、ないだろうか。一緒にいれば、意識するのは当たり前である。翔は、杏奈の視線を背中に感じながら、凜への思いを募らせていった。そして、あの瞬間が、訪れてしまった。

「あ……。ごめん。」

何も、考えてなかった。そこに、凜の顔があつた。瞬間、凜に家庭があるとか、子供がいるとか、そんな事は、飛んでいた。ごく、自然に凜の唇を求めていた。そこから、凜に逢いたいと思いつながら、普通とは、違う恋愛の苦悩が待ち受けていた。凜とは、一緒になれない。そう思いつながらも、杏奈とは、別れる決心をすすめていた。杏奈の思いは、自分にとって、負担にしかならない。いつも、周りを気にし、顔を伺って行動する。常に翔の行動を把握したが、メールの返信が、すぐ来ない事で、不安定になった。「別れよう。」何度目だろう。この別れ話は、翔は、考えた。杏奈は、翔との結婚を迫っていた。病気のせいで、早く子供を生む事をすすめられたらしい。だが、そんな事で、人生を決めたくなかった。まだ、やりたいう事がたくさんあつた。

「まだ、結婚はできない。」

「でも。早く、子供を作るようにして……。」

「まだ……。父親には、なれないよ。」

翔は、ため息をついた。杏奈は、可愛い。恋人でもある。だが、それ以上は、考えられなかった。付き合った先に、結婚があるとしたら、杏奈とは、別れるしかない。

「たぶん・・・」

言おうかどうか、翔は悩んだ。

「気になる人がいる。」

「誰？」

乾いた声だった。

「それは、言えない。」

杏奈の狂気が恐い。

「あの人なの？」

勘が鋭かった。

「違う。」

翔は、否定したが、その様子が、杏奈を確信させた。

「駄目。あの方は！翔は幸せになれない！」

そう言われて、翔は、感情が高ぶった。

「それは、お前には、関係ない！」

「嫌なの。翔。あの人だけは、嫌。」

「だから・・・違うって。」

「お願いだから・・・別れないで。翔・・・」

翔にすがりつく杏奈だった。

夜桜。

桜の海が、眼下に広がっていた。街の中央に、ある花見山。展望台から、見下ろすと一面の海。時間は、もう7時を過ぎていた。帰ろうとする凜を引き止め、優奈と一緒に迎えに行つて、一緒に見る夜の桜。

「綺麗・・・」

凜は背伸びして、桜に顔を近づけていた。

「無理して・・・届かないじゃん。」

翔は、笑った。

「バカにして・・・」

翔の膝の裏を蹴った。

「脚の短い人には、言われたくありません。」

「脚が短いんじゃないの。頭がでかいの。」

言い返す翔。もう、凜の家族は、バラバラになってしまふのだろうか・・・。それは、不安でもあり、凜と夫が、別れるという事は、翔にとつて、複雑だった。このまま、凜に自分の思いをぶつけていいのだろうか？翔は苦しんでいた。逢えば、逢うほど、凜に魅かれていく。引き返すのなら、今のうちだ。もう、自分の中で、凜はなくてはならない存在になり、自分を支えていた。これから先、凜を失う事なんて、考えられない。自分は、このまま、凜の傍にいていいのだろうか？度重なる、旅行や逢瀬で、逢わないでいる事ができなくなっていた。

「優奈も桜みたい!」

この小さな凜に、自分はどれだけの事が出来るんだろう・・・。

「おにいちゃん。抱っこ」

優奈は、手を差し出した。

「優奈。重そう・・・」

「ひどい。」

優奈は、唇を突き出して怒るのだった。この親子の力になりたい。

「ねえ。凜？」

「はい。」

凜は、振り返った。

「俺は、力になれるかな？」

「どうしたの？急に。」

「凜と優奈の力になりたい。」

「大丈夫よ。」

ゆっくりと、凜は、微笑んだ。

「翔は、力になってる。もう、十分にね。」

「本当に？」

「そう。私は、頼りにしてる。最初は最悪だったけど。」

「あっ・・・。」

店のレジであった、最初を翔は思い出していた。

「最初って？どの？」

「倉庫で逢った時。」

凜はキスした時と言いつうになつて、紅くなった。

「じゃなくて・・・。」

「何、紅くなってるの？」

「いや・・・その。」

「初めて逢ったのはね。」

翔は、レジで逢った日の事を話した。

「凄い・・・。落ち着かない人なんだろうな・・・。って、思ってた。」

「今は？」

凜は、鼻を突き出した。

「やっぱり、落ち着かない人。」

翔は、笑った。この時間が、ずーっと、続けばいい。翔は思っていた。でも、この後、翔は衝撃的な場面を見る事になる。マンションに戻ると、凜の夫・悦史が、戻っていた姿だった。この日の光景を忘れる事は出来なかった。

手の届かない人。

凜といたい。出来れば、ズーっと、一緒にいたいと願っていた。でも、冷静に考えれば、叶う訳が無い。実際、腕の中に凜がいたとしても、現実には、手の届かない人なのだ。諦めよう。何度も、思った。その都度、後、少しで手が届きそうになる。

「もしかしたら・・・。」
先を考えるというより、一緒にいたいという気持ちだけだったと思う。

「ゆうの奴、驚くだろうな・・・。」
特大のプリンを買った。優奈も凜もプリンが好きだった。そして、自分も。三人で、晩御飯を食べる。そして、これから、先の事を考える。もう、凜達、夫婦は、壊れていた。自分の存在がなくなるとも、とうに壊れていた夫婦関係。これから、凜を支えて生きたい。翔は、そう思っていた。もし、家族になれないとしても、凜の力になる。マンションのドアを開けると、思いもかけない光景が広がっていた。玄関に見慣れない男ものの革靴があった。悦史のであろう。このまま、引き返そうかと思っただが、凜の普通ではない声の調子が心配だった。自分の気配を消すように、息を堪え、進んでいく。凜と悦史が、対峙していた。

「凜。」
そう言いながら、自分の声がかすれているのに、気付いた。

「翔。」
翔の姿をみつけ、凜が悲しそうな顔をした。ここに、現れた翔に戸惑っていた。この悦史と凜が、話し合っているのを、凜は、聞かれたくないのだ。翔は、察知した。

「ゆう。」
優奈を呼んだ。自分は、ここに居ては、いけない。凜が、困っている。家族の話し合いに、自分が入ってはいけない。

「おにいちゃん！」

優奈は、翔に走りよってきた。そっと、抱き寄せる。

「ごめん。行かないきゃ。」

凜には、何を言う事があるだろうか……。この場で、自分の思いを伝える？ そんなバカな。一番、この優奈の幸せを考えると、家族と共に過ごす事なのだ。

「何処に行くの？」

優奈は、翔の腕の中で、呟いた。

「また、逢える？」

「逢えるよ。」

「本当に？」

「うん……。」

翔は立ち上がった。買ってきたプリンを置いた。一緒には、食べられないな。一人でも、食べられるサイズにすれば、良かったな。翔は、笑った。凜の顔は、見れない。見たら、気持ちが悪かった。戻ってしまった。彼女との思い出は、沈めてしまおう。凜の顔は、見なかった。みつめれば、未練が残る。きっと、自分は、彼女を忘れる事は、出来ないだろう。

「翔！」

凜の声が耳に届いた。彼が何を考えているのか、わかったのだろう。引き止める声だった。だが、悦史がいる。悦史が、ここにしようとしているのを、感じ取った。ここから、去ろう。

「待って！」

もう、終ろう。自分のものに、ならない人の事で、苦しむ恋は、自分にむかない。忘れてしまえ。

翔は、マンションのドアを開けた。戻らない。この凜と過ごした日々と、別れる。優奈の泣き出す声が聞えた。薄い光の中へと、翔は出て行った。

さよならの夕陽

外の光は、いつもと違かった。光は、冷たく、空気は肺を刺した。凜と別れる。もしかしたらと思わない日はなかった。凜と結婚し、優奈と3人で暮らす。一緒に居られるだけで、幸せ。そう思っていたのが、次第に、夢みるようになっていた。

「結局、無理だったんだよ。」
隣に誰が居るわけでもない。翔は呟いた。

「一緒に居られる訳がない。」
悦史と凜を見た。その時、二人の間には、入っていけないと思った。自分は、ここにいいては、いけない。家族の姿がここにある。

「さよなら。」
もう、このマンションにくる事はない。何度も、ここに通った。優奈の迎えてくれる明るい笑顔が好きだった。凜の笑顔も好き。目元に出来る笑い皺。自分が年上である事を気にしていた。髪の毛が好き。しっかりとっているようで、抜けている所が好き。一つ、一つ、凜の好きな点をあげていく。鼻の奥がツーンとしてきた。目元が熱い。こんなにも、自分は……。凜と離れがたい。翔の目から、涙が、零れ始めていた。

「凜。」
別の人生を歩こう。大切な人の幸せを願って別れる。そんな愛情の形もある。その後、どう帰ったのか、覚えてなかった。無意識で、マンションのドアを開け、部屋に倒れ込んだ。何も考えたくなかった。食べる事も寝る事も、出来なかった。何かをするという気力がなかった。時間だけが、過ぎていく。自分の意思とは、関係なく時間だけが、過ぎていく。何度も、電話がかかってきていた。メールも届いていた。そんな携帯を見る気さえにならない。カーテンさえ閉める気もなかった。いくつかの夕方が来ていた事に気付いた。心だけが、寂しがっていた。夕焼けが綺麗だった。

「翔？」

杏奈からも、心配する連絡が入っていた。

「仕事。無断で休んでどうするの？」

翔を心配して、店長からも、何度も連絡があった。

「杏奈。」

翔は笑った。結局、別れた、女に頼っている。

「仕事辞めるわ。」

「何があつたの？翔。私で良かったら、話して。」

「無理だよ・・・。」

杏奈も、気付いていた。

「別れたの？」

翔は応えなかった。

「そうなのね。」

杏奈は、電話の向こうで、翔がどんな様子でいるのか、察しがついていた。翔が、どんなに、凜を思い、今、傷ついているのか・・・。

「私に出来る事があつたら、言つて。」

「そうだな・・・。」

翔は言葉を探した。

「杏奈。我儘言つてごめんな・・・。」

「そんな事ない。」

「一人になりたいんだ・・・。」

「うん・・・。」

何故か、杏奈は泣いていた。

「わかるよ。翔。」

「俺。最初に戻りたいんだ。ごめんな・・・。杏奈。」

「いいよ。翔。」

杏奈は、電話を切った。窓からは、夕陽が差していた。いつか、凜と見た夕陽。翔の影だけがあつた。

「終つたんだよ。」

ため息が出た。やる気がでない。凜が、翔の全ての生きる気力を奪

っていた。何日か過ぎた後、連絡のとれない息子を心配して、母親が顔を出した。母親が目にしたのは、やつれ果てた我が息子の姿だった。

君が見える。

もう、終わったしまった恋。手元に残ったものを少しずつ、片付けていった。凜が作ってくれたチョコカ。食器。クッション。凜が居た時の思い出を一つずつ、整理するように、棄てていく作業。手にとると、その時の会話が蘇ってくる。離したくない。思い出として、とっておきたい。そう思う。でも、もう、先に進まなければならぬ。凜と居た思い出に、もう、別れを告げる。

「翔。」

何度か、翔の変化に気付いた友人が、メールをくれていた。尋ねてくる友人もいた。中には、泊り込んでくる友人もいた。その都度、翔は、

「大丈夫。」

と、笑っていた。覚悟していた結果だった。いつかは、そうなるとも、思い。もしかしたらとも、思っていた。

「これは、お土産。」

友人がくれたお守り。恋愛成就とあった。

「女子高生じゃあ、ないし。」

翔は、笑い飛ばした。

「心配してんだよ。」

真顔で言われて、持ち続けた。

「結局さ……。また、次回って事になったな。」

翔は、引き出しの奥にしまった。

「あなたさ……。どうするの?」

実家の母親が、度々、顔を出しては、小言を言った。仕舞いには、

「家に帰ってきたら?」

親らしい顔をした。

「お父さんの後を継いでも、いいし。」

「それは、ないっしょ!」

翔は自立したかった。

「親の七光りつては、言われたくない。」

やり遂げたい事があった。

「人を喜ばせたいんだ。」

翔は、マンションを出た。親元に戻り、資金を集めた。

「俺の力で出来る事があるはず。」

翔は、行動し始めていた。本当に、縁があれば、きつと、叶う。そう信じて。以前から、興味もあり、専門に通って、得た技で、やっていこうと決めていた。

「自分の店を持つと思う。」

そう、実父に宣言した。最初、反対していたが、翔の心意気に負け、た形となった。

「親の力は、借りない。」

小さくてもいいんだ。翔は、自分の夢の真っ直ぐつきすすんでいた。それは、まるで、凜を忘れるために、仕事に没頭していくようにも、見えた。

「春には、開店できると思う。」

友人達が、お祝い会を開いてくれた。幾分、痩せた感じだったが、凜と別れた当初より、顔色もよく、精悍な顔つきになっていた。

「ここに・・・。一番喜んでくれる人がいればいいんだろな。」

誰かが、ふと、こぼした。

「ああ・・・。そうだな。」

誰かが、不味いという顔をしたが、翔はいたって、普通に居られた。もう、過去の事となりつつあった。

「喜んでくれると思う。」

そつだよ。もうすぐ、桜の季節がくる。凜と優奈と一緒に見た。あの桜の季節が・・・。春の夜は、肌寒い。それなのに、あんなの暖かい思い出は、ない。桜のように、切ない恋で終わってしまうのか・・・。

「縁があれば、また、逢える。」

誰かが、言った。きっと、また、逢えそつな気がする。

「凜。」

後は、開店を待つだけとなった、お店の前に、何処からとなく、桜吹雪が舞っていた。

「なんとなく、本当に、逢えそつだよ。」

淡い朝の光に、凜の姿が見えそつだった。

「きっと、逢える。」

凜の声が聞こえる気がした。

了。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6620o/>

夜桜みる夢。（番外編）翔・・・。

2010年12月12日22時38分発行